

巻頭感 私の夢見る図書館像—開かれた図書館をめざして

図書館長 内田 慶市

研究者の道を志して以来、世界各地の図書館を渡り歩いてきたが、いつも感じてきたことがある。それは日本あるいは広く東アジアの図書館と欧米の図書館との決定的な違いである。そして最近では、これは実は「東西の文化」や「ものの見方・考え方」の違いではないかと思うようになってきている。それは何かと言えば、とことん「利用者」の側に立ったサービスを心がける図書館と、あくまでも「(図書) 管理者」の側に立ったそれとの違いである。

たとえば、これはこれまでも色んなところで言ってきたことである（「秘蔵は死蔵なり—図書館と文献公開のあり方」『東方』360号、2011.2）が、貴重書（Rare Book、善本書）の取り扱い方である。日本では（我が関西大学でも同様であるが）、大概が予め（1週間ほど前に）閲覧予約・申請をし、館長の決裁がおりて初めて閲覧が可能となる。また、その複製（duplicate）なども結構面倒で、時には許諾されない場合もある。ところが、欧米の図書館では、私は何十年も利用してきているが、そうした経験をしたためしがないのだ。もちろん、閲覧申請が午前だけとか、午後の何時までとか、幾つかの小さな制限はあるのだが、当日行って申請しても殆ど見せてもらえるのである。

貴重書専門のハーバードのホートンライブラリーでも、大英でも、パリ国立図書館でも、オックスフォードのボードレイアンやケンブリッジのワイリーコレクション、ウェードコレクションでも、ローマやナポリ、スペインの国立図書館でもどこでもそうなのである。いつだったか、突然訪れたボードレイアンやウェードコレクションでは書庫まで入れてくれたりした。しかしながら、日本や中国では、まずこうはいかないのである。

この違いは一体何なのか。おそらくそれは、「利用者の便」を最優先するということと、「図書の使命とは何か」に対する考え方の相違である。つまり、欧米では「図書はあくまでも人に読まれるべきもの」という考え方が根本にあるのだと思う。面白いのは、それが「著作権」や「所蔵権」などのいわゆる「知的所有権」に対する意識と反比例しているということである。欧米では、この「知的所有権」には極めて敏感であり、その権利を守ることが最低のモラルとなっている。大いに公開するが、他方、その権利は保証するという一見矛盾する考えが徹底しているのである。これが東アジアになると逆転するのだ。「コピー天国」は必ずしも中国や韓国の専売特許ではなく日本だってその傾向は昔からあるのだ。特に知的所有権についてはその意識は明らかに低いと思われる。大切なものは人にはなるだけ見せず、他人のものは自分のものとして知らぬ顔。東西の図書館の根本的な違いはここに由来すると私は考えている。

しかしながら、情報公開や国際ネットワーク、文献アーカイブス、データベース化はすさまじい勢いで発展しており、もはや「秘蔵」などと言っているような時代ではなくなっているのだ。

隠しておいて何になるのか。紙もいずれは朽ち果てて、結局はその使命を果たさずに終わるのである。「図書館は博物館ではない」というハーバード大学イェンチン図書館のJames Cheng館長の言葉を特に東アジアの図書館関係者は心して聞くべきであるし、電子化が一方では、人類の「知の保存」でもあることを認識すべきなのである。

貴重書の扱い方だけでなく、東アジアの図書館が西に学ぶべきことは他にも沢山ある。WiFiなどの通信インフラやラーニング・コモンズなどは欧米ではもう当たり前。1年365日とは言わないまでも休館日はほとんどなく、しかも夜遅くまで（中には24時間）利用が可能である。バッグを持ったまま書庫に入れ、しかも、そこにはそれぞれに机と椅子が用意されていて、自分が読みたい本もキープしておけるのだ。日本でもそのような図書館がいつの日か出現することを私は夢見ているのである。

すでに予定の紙幅をオーバーしているが、ついでに私が「夢見」していることをもう1点述べておきたい。それは「アジア学研究図書館」の開設である。

関西大学はGCOEや卓越した大学院採択に象徴されるように、東アジア学の研究においては世界をリードする位置にある。それは、東西学術研究所の伝統を受け継ぐものでもあるが、更に、この分野における蔵書において関西大学図書館は世界に誇るべきものを有している。内藤文庫、泊園文庫、長澤文庫、増田文庫、吉田文庫、中村文庫等々の個人文庫はまさに世界中の研究者の垂涎の的となっている。これらの財産を活かすべく、アジア学に特化した「研究図書館」を総合図書館に付設できないかと考えている。そして、「アジア学研究なら関西大学の図書館で」といった、いわゆるアジア学研究的「ハブ図書館」として世界にアピールするのである。そのためには、国際ネットワークの充実が不可欠である。現在、ハーバード大学イェンチン図書館、ルーヴェン大学図書館とはすでに相互利用に関する協定を締結しているが、今後、こうした協定図書館を増やしていきたいと考えている。

(うちだ けいいち 外国語学部教授)